
～ 無口な転校生と初心な僕～

elekent

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～無口な転校生と初心な僕～

【Nコード】

N3770Y

【作者名】

element

【あらすじ】

お題『転校生との恋』で書いてみました！！・・・無口は無口でも『寄せ付けない』無口なのか、『おどおど』無口なのかで考え、『幼馴染』を入れるかも考えましたが、とりあえず『無口（自分の気持ちを表現出来ないタイプの転校生）と『ショタ風の僕』の二人のみの文章（『転校生』の心の中は書かず、言っていることのみ）で構成していこうと思います。

『前・始まり『起承』』

僕のクラスに転校生がやってくるという話を聞いた。女子らしい。そして僕の席は空いていて、三学期になるまでは席替えはしない、これはつまり転校生と僕は二学期の間は隣同士ということだ。正直かなり緊張した。僕はあまり女子とは話さないし、男子とも仲のいい友達としか話していないから。

そして教室のドアが開いて先生が入ってきて、よくドラマでも聞くお決まりの台詞を言ってクラスの外で待機していたであろう転校生を手で合図して入らせた。

その女子が入ってきた時、僕は彼女に恋をした。いわゆる一目ぼれだったと思う。

ショートカットの黒髪を風で揺らしながら彼女は自己紹介をした。僕の通っている学校にはアイドルのような可愛い女子もいたけれど、僕は好きだとは思わずただ『可愛いな』としか思っただけだった。

確かに転校生が珍しいからかもしれないけれど、僕には他の女の子よりとても可愛く見えた。僕は隣の席が空いていることに今まで苦労して運が悪いと思っただけで、今は席が空いていたことに感謝をしていた。

「こ、こんにちは！これから宜しくね！！」

「・・・・・・よろしく。」

よし、いい話しかけ方だ、僕。

朝のホームルームが終わると彼女へのクラスメイトからの質問攻めがあった。僕も質問を一つだけしよう・・・なるべく相手の気分が悪くならない質問を。

「好きな食べ物は何？」

「・・・桃です。」

休み時間が終わり授業が始まる前に彼女に僕は言った。

「まだ授業は届いてないよね？見せるよ！」

「先生から予備の分もらってるから大丈夫です。」

昼休みになり彼女は机の上を綺麗にして席を立ったので僕は彼女と一緒にクラスを出た。

「昼ご飯持ってきてないの？購買があるからパンを買ってきてあげるよ！僕も購買だから！何か食べれないパンとかある？」

「今からトイレに行くので。すみません。」

・・・会話が続かない。嫌われてはいないと思うんだけど・・・

そして午後の授業が一つ終わり、次の授業が始まる前の休み時間の時にお腹の鳴る音がした。周りを見渡すとお腹を抱えて机に伏せて

いる　ちゃんがいた。僕は鞆から購買で買っておいたパンを取り出して

「・・・ごめん、　ちゃん。」

「・・・何ですか？」

「さっき購買で買ったパンが鞆に入らなくなっちゃったんだけど、二個もらってくれない？」

「貴方が買ったものだから、いらない。それに、貴方のためにお金を渡した親に失礼になります。」

「大丈夫！！これ小さいパンをまとめて買ったやつだから安いし、僕のお金で買ったんだから、僕のお金で買ったパンを君にあげても大丈夫だよ！！」

「・・・ありがとう。貰うね。」

コンビニのバイトをして良かった！！

数学の授業の時、彼女の方を見たら、教科書と黒板を交互に見て手を忙しく動かしていた。

「もしかして前の学校でやったところより進んでる？」

「・・・二単元くらいは。」

「じゃあ僕が後で数学のノートを貸してあげるよ！！」

「・・・でも貴方が明日の予習が出来なくなるから迷惑になります。」

「もう数学のノート、残り二ページしか無かったし新しいノートを買おうと思ってたんだ。だから持っていてても大丈夫だよ！！」

「・・・では、借りさせてもらいます。・・・ありがとうございます。」

・・・僕の数学ノートが　　ちゃんの家にお泊りするのか。羨ましいなあ・・・

「他には借りたいノートとかない？貸してあげるよ？」

「・・・もう十分です。」

・・・彼女の前でやましい気持ちにならないように気をつけよう。

そして文化祭の季節には

「この高校は最初に昼ごはん用の食べ物を三年生から順番にバザーで買うのがマナーなんだよ！」

「・・・そう、知りませんでした。」

「ねえ！！良かったら一緒に回らない？僕は見回りの係りだから、一人なんだ！！」

「・・・大丈夫。それに、貴方と呼んでいる男子があっちで待っています。」

・・・一緒には回れなかったけれど。

二学期の最後にあった体育祭では

「　　さんって二学期に転校してきてまだ体育祭で何に出るか決めてないよね？僕が　　さんと仲よく話している女子のやっていると

ころに入れておくよ！！僕、体育祭実行委員だから！！」

「・・・貴方、沢山の係りをしていますね・・・あと、なぜ私に話しかける女子を貴方は熟知しているのですか？」

・・・仲の良い女子と一緒にムカデ競争をしていた。僕は綱引きだったので一緒に練習は出来なかったけど。

そして二学期の終業式が終わり、解散のHRの前に僕は彼女に思い切って用意していた質問を試みることにした。

「さん、クリスマスはどう過ごすつもりなの？（一人で過ごすなら・・・）」

「九州の祖母の家で過ごすつもりです。」

・・・そうして彼女を誘うことは出来ずに去年と同じクリスマス・正月を過ごして、いつの間にか三学期になった。

『中・『承転』』

まあ、もちろんクラス内の二人が再び隣同士になることはほとんど無いわけで、そして僕の場合にだけ奇跡が起こるわけでもないわけで、僕と彼女は少し離れた席になってしまった。

僕でも離れた席の幼馴染でもない女子に話しに行く男はがめつく思われることくらい分かった。そして来年には別のクラスになってしまってもう会う機会すらなくなってしまうのも……………」

そう思いながら席替えの後の授業を受けていると、
「おい、。気分が悪いなら保健室に行くか？」
「はい…………すみません。」
と彼女に言う先生の声が聞こえました。

僕は保健室に気分が悪い人を保健室に連れて行くのは保険係であり、保険係には男子しかいないことは知っていました。でも、僕は彼女が他の男子に頼り、肩を貸している姿を見たくなかった。僕は笑われたり彼女に避けられることを出来るだけ考えずに、手を少し、でも精一杯あげて先生に僕は言った。

「君、お願い…………」先生！僕が連れて行きます！！」

「……………あ、うん。」僕はその時間抜けな返事をしたに違いない。

彼女を保健室まで肩を貸してあげて連れて行く。僕はその時彼女の鼓動が早まっていることに気づき、

「（これって、もしかして僕にドキドキしてるんじゃないか！）」

そして保健室に着いたら常駐の先生が見えたので、彼女の状態を話した。

僕は彼女にさりげなく聞いた。

「保健室に送つているときに鼓動が早くなつてたけど、大丈夫！？」

「・・・これは幼稚園の頃からよく起こることだから。心配しないで・・・」

・・・別に僕にドキドキしてた訳じゃないんだ・・・

そして僕は教室への道を歩き始める。

「これじゃあ今の僕、とんでもない勘違い野郎だよ・・・」

そして一週間が過ぎ、三月も中盤に入ったころ、

放課後。

「・・・ねえ、少し頼みたいことがあるんだけど。」

そう彼女に聞かれた時にボーっとしていた僕は

「うんっ？」と答えた。

彼女から「黒板消しを手伝って欲しいの。」

と頼まれ、僕は手伝うことにした。

「日直の日誌と一緒に届けてくれない？」

ちゃんからクラスを点検し終わったころ言われ、二つ返事をし
て、夕暮れの中僕がやや先に廊下を歩きながら職員室へ向かってい
るときに

「・・・もう一つ貴方に頼みたいことがあるの」

そう彼女に言われ、僕は二つ返事で答えた。

「・・・私と親友になって欲しいの」

「・・・えっ？」

『ずっと続いていく物語　『不結』』

- - - - -

「親友？」

「・・・うん、私、貴方が好きなの。」

・・・周りを見渡した。夕方の教室の廊下には誰もいなかった。

「それって親友じゃなくて・・・・・・彼女とか、恋人って言っんじゃない。」

　　ちゃんは僕の声を遮って僕に答えた。

「私、いつも気にかけてくれる貴方がことが好きなの。」

でも私、まだ上手く人前で話すことが出来ない。だからまだ貴方の恋人にはなれない。　　君に失礼だから。」

「失礼じゃないよ！！そんなの僕は気にしてないんだ！！」

「私は貴方と恋人みたいに学校で接したいの！！私は貴方の恋人だつてこと、皆に見せたいの！！貴方がことが好きだから！！」

「・・・ごめんなさい。まだ私は貴方の返事を聞いてないのに・・・。」

「僕も君のことが好きだ！！　　ちゃんのことが大好きなんだ！！」

「・・・っ！！」

「だから僕、待つよ！！君が僕のことを恋人だと言えるまで、僕は待つよ！！だから・・・・・・泣かないで！！一人で考え込まな

いでよ!!

「…………『親友』でしょ？僕たち」

「……………ありがとう。私、貴方のことを好きになって良かった。」

「僕の方こそ、ありがとう。僕を好きになってくれて。」

こうして僕と　ちゃんは『親友』になった。

確かに他の人から見たらおかしいと思うのかもしれない。

でも僕にとっては　ちゃんは『親友』であり、『彼女』であり、

ちゃんにとっても僕は『親友』であり、『彼氏』だと想っていることはお互い分かっているから

互いに相手が自分を愛していることを、好きでいてくれることを信じていられるから

これはずっと続いていく二人の恋愛物語。

「ねえ、君」

「ん？」

「私、来年の正月は一緒に神社にお参りしにいきたい。」

「うん！！僕もちゃんと一緒に神社に行きたい！！」

「うん・・・！私のおばあちゃんのお雑煮、君も気に入ってくれると思う！！」

「君の生まれ故郷の九州に行くことは前提なんだね・・・」

「・・・これはずっと続いていくと思う二人の恋愛物語。」

（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3770y/>

～無口な転校生と初心な僕～

2011年11月9日19時05分発行